

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 7 月 31 日現在

機関番号：36301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870636

研究課題名(和文) 民国期の武術におけるチャイニーズネスの構築と衝突 官/民の「国術運動」を事例に

研究課題名(英文) The Construction and Conflict of Chineseness in Wushu of Prewar China: by the Case of National Wushu Movement between Public and Private

研究代表者

池本 淳一 (IKEMOTO, Junichi)

松山大学・人文学部・講師

研究者番号：90586778

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では戦前の中国における武術雑誌の内容分析を通じて、武術とチャイニーズネス(中国/中国人らしさ)の関係を考察した。

具体的には、前期(1921～30)において武術が芸術と同等の「高級文化」、さらには近代的身體を育成する「中国発祥の近代体育」として再構築されていったこと、後期(1931～41)において武術が固有の文化的価値と社会的役割を持つ「中国の民族体育」として、さらには悠久の歴史と深遠な中国哲学を持つ、もっとも「中国らしい」国民文化として再構築されていった過程を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This study researches the relationship between Wushu (Chinese martial arts) and “Chineseness” through content analysis of Wushu magazines from 1921 to 1941. The study concludes with the following points:

First, Wushu was reconstructed as a “high culture” equivalent to traditional Chinese art and as “a modern sports that created by China’s own” in 1921-30. Second, Wushu was reconstructed as “Chinese ethnic sports” and being given a unique cultural value and social role. Meanwhile, Wushu became the most representative “National culture” which embodies the long history and profound China philosophy in 1931-41.

研究分野：武術史、歴史社会学

キーワード：中国 武術 内容分析 近代化 チャイニーズネス

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、すでに近代中国史の分野では、中国や中国人という概念が、帝国主義への抵抗や近代人種論の受容を通じて歴史的に形成されてきた、きわめて近代的な構築物であることが指摘されていた。また国内の社会学系中国研究においても、それら中国/中国人概念を支える「チャイニーズネス」(中国らしさ/中国人らしさ)とは何か、が叢書やシンポジウムを通じて問われ始めていた。

加えて当時は、グローバル化や国際移動の進展により、従来の硬直化した中国/中国人概念と現実の中国社会との間に齟齬が自覚されつつあった。

本研究はこれらの背景の下、中国武術研究の知見を用いて、戦前の中国における身体を媒介にしたチャイニーズネスの形成過程について明らかにするものとして着手された。

2. 研究の目的

前近代における中国武術は、主に農民による村落自衛や秘密結社・宗教団体の自衛手段として、ごく一部の人々の間でのみ継承されていた。またそれらは長らく民衆の習俗としての位置にあり、その文化的な価値が読書人や支配階級に認められることもなかった。

一方、民国期においては、武術が愛国心や身体の育成手段として、一部の軍人や知識人の注目を集めるようになった。そして彼らを中心に、武術のテキスト化や軍・学校への導入が試みられた。その結果、武術の正式名称が「国術」と制定され、政府から「中国の」身体技法として公認されるようになった。また民間においても多くの武術団体が結成され、武術の普及と学術的研究が本格化した。

しかし当時の民衆にとって武術はいまなお粗野な民衆の習俗であった。また官僚や政治家、文化人の中には、武術を書画や文学に匹敵する「中国を代表する」文化と見なすことに、根強く反対する者も少なくなかった。

ゆえに武術が名実ともに「国術」(ナショナル・アーツ)となるには、人々に武術の社会的役割や文化的価値を語りかけることで、「中国の」国民文化として認めさせていく言説活動が不可欠であった。そしてこの言説活動の場として選ばれたのが、各武術団体が発行した機関紙や雑誌(以下「武術雑誌」)である。

本研究の目的は、第一にこれら武術雑誌における武術言説の変遷を明らかにすることである。第二に、この変遷を通じて、武術が中国を代表する国民文化、すなわち「チャイニーズネス」を体現する身体文化となっていた過程を明らかにすることである。第三に、この過程において、官と民、中央と地方がどのような役割を果たしていったのかを問うことである。

3. 研究の方法

(1) 内容分析

民国期に発行された主要な武術雑誌を収

録した積永信主編『民国国術期刊文献集成』(全31巻、2008年、中国書店)をもとに、各武術雑誌の見出し・記事タイトル等をテキストデータにして使用した。さらに武術雑誌を含めた体育関係雑誌の目次を収録した許義雄主編『我國近代體育報刊目録索引』(1994年、師大書苑有限公司)を用いて、『民国国術期刊文献集成』未収録の号を補足した。

なお表1が本研究で使用した雑誌である。表の「発行数」は発行が確認できた号数、「収録数」は本研究でテキストデータ化できた号数である。民国期の武術雑誌には所在不明や非公開のものも少なくないため、本研究では民国期のすべての武術雑誌・号数を対象にすることはできなかった。しかし発行数が不明なものを除けば、本研究では9割以上の号数をテキストデータ化することが出来たため、本研究では武術雑誌における言説の大半をフォローすることができたとと言えるだろう。

なお表中の「↓」は改名して続刊された雑誌である。

『誌名』(発行団体)	発行期間	発行数	収録数
『武術』(中華武術会)	1921	1	1
『中央雑誌』(上海精武体育總會)	1922-23	?	6
『精武』(上海精武体育總會)	1923-39	?	13
『精武春秋』(上海中央精武会)	1929	2	1
『佛山精武月刊』(佛山精武会)	1925-28	21	18
『精武雑誌(香港版)』(香港精武)	1925-26?	?	1
『精武画報』(中央精武会)	1927-32	41	34
『体育』(北平特別市国術館)	1932-40	58	56
『国術(浙江省国術館月刊)』 (浙江省国術館)	1929	2	2
『中央国術旬刊』(南京中央国術)	1929-30	12	11
『国術週刊』(南京中央国術館)	1930-36	169	121
『国術週刊(天津版)』 (天津德武学社)	1935	16	16
『国術半月刊(上海版)』 (上海揚武国術会)	1932	4	4
『国術半月刊(湖南版)』 (湖南国術訓練所宣伝科)	1932-?	?	1
『山西国術体育旬刊』 (山西省国術促進会)	1934-35	40	39
『国術声』(上海市国術館)	?-1936	?	11
『精武叢報』(上海精武体育会)	1933-41	?	9
『国術統一月刊』 (上海国術統一月刊社)	1934-35	4	4
『精武(廈門版)』 (廈門精武体育会学術部)	1934	5	5
『国術月刊(天津版)』 (天津国術館編審科)	1934-35	13	13
『求是季刊』(山東済南健康実験)	1934-35	2	2
『求是月刊』(山東済南健康実験)	1934-36	18	18
『侠魂』(山東済南健康実験学社)	1936-37	6	6
『国術月刊(陝西版)』 (陝西省城固国術研究会)	1939-40	2	1

表1 誌名・発行期間・発行/収録数

表2は発行年別にテキスト化した「見出し」と「記事」の総数を集計したものである。下記で用いるグラフでは『対象項目の件数÷「見出し」または「記事」総数』から、発行年別に対象項目が武術雑誌の紙面において占めた割合を算出して記述した。

年度	1921	23	24	25	26	27	28	29	30	31
見出し数	11	44	40	48	114	57	43	133	30	46
記事数	36	230	245	225	449	314	178	403	80	232

年度	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	合計
見出し数	181	102	302	526	158	60	49	23	13	0	2048
記事数	414	231	948	1323	570	171	71	81	30	20	6251

表2 見出し及び記事の総数

(2) イラスト・写真分析

各時期を代表する書籍や雑誌に掲載されたイラスト・写真から、視覚的な「チェーンズネス」の構築について考察した。

(3) 武術関係図書による確認

釈永信主編『中国武術大典』（全101巻、2012年、中国書店）収録の書籍及びその他の武術関係図書を用いて、それぞれの分析結果について考察を加えた。

4. 研究成果

(1) 時代区分

図1は発行年別に武術雑誌の発行件数（一誌を1と計算）をグラフにしたものである。なお改名して続刊された雑誌は一誌として集計した。

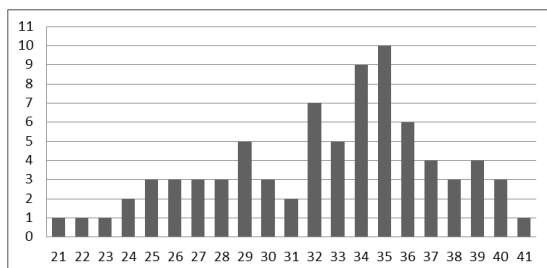


図1 武術雑誌の発行件数

図からは、武術雑誌の発行件数は1921～30年までは比較的少数ながらも安定していたこと、一方で1931～41年までは比較的多数ながらも年ごとの増減が激しかったことが確認できる。

また上記の表1を見ると、1921～30年の時期には「精武会」（上海発祥の民間武術団体）系の武術雑誌が多く、1931年からは「国術館」（全国的な半官半民の武術団体）系及び地方の武術団体発行の雑誌が多いといった質的な違いも見られた。

そこで本研究ではこれら量的・質的な違いをもとに1921～30年を「前期」、1931～41年を「後期」と区分し、この両時期を比較した。

なお後述の各図ではグラフ内に縦線を引き、左側を前期、右側を後期として示した。

(2) 見出し分析

武術雑誌の記事には「専著」「言論」「教材」

「余興」等の「見出し」が振られているが、その変遷を確認することで両期における紙面の構造や編集方針を分析した。ただし1921、40、41年は「見出し」総数が13以下と希少のため分析から除外した。

具体的には、それぞれの見出しをその内容に応じて「論説」「連絡・報告・ニュース」「技術テキスト」「娯楽・読物・翻訳」「写真・イラスト」「その他」に分類して集計し、発行年別にその割合を算出した（図2-1、図2-2）。

結果、前期には「娯楽・読物・翻訳」「写真・イラスト」が、後期には「論説」が多い傾向が見られた。この傾向から武術雑誌は、前期にはビジュアルや娯楽も重視する「総合雑誌」、後期には「武術とは何か」を論じる「論壇誌」としての編集方針が存在していたことがわかった。

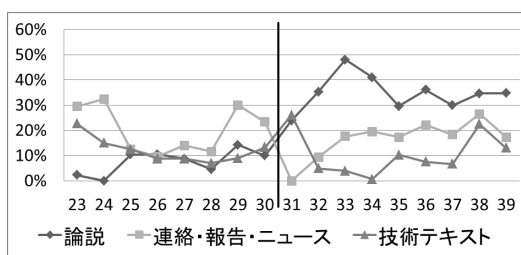


図2-1 論説 / 連絡・報告・ニュース / 技術テキスト

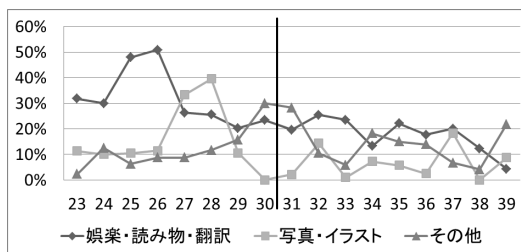


図2-2 娯楽・読物・翻訳 / 写真・イラスト / その他

(3) 記事タイトル分析

続いて両期にどのようなテーマがどのくらい紙面を占めていたのかを確認するために、各記事を記事タイトルに含まれる単語を基準に以下の項目に分類し、発行年別に集計してその傾向を確認した（図3-1～3-6）。

「論/談」：論/談の単語が含まれる、武術関係の記事。

「芸術」：彫刻/画/音/詩/歌/曲の単語が含まれ、かつ武術と無関係の記事。

「提唱国術/体育」：提唱国術/提唱体育の字句が含まれる記事。

「武術関係論」：～与国術/～与武術/～与精武などの字句が含まれる武術文化と他領域の関係を考察した記事。

「体育比較論」：体育与国術/国術是～体育などの字句が含まれる、体育と国術の関係を考察した記事。

「救国論」：復興/抗日/救国/国難などの反帝

国主義やナショナリズムに関する単語・字句が含まれる記事。

「武徳/倫理」: 武徳/人格など、武徳や倫理、人格に関する単語・字句が含まれる記事。

「国術史」: 国術史などの字句が含まれる記事。

「武術史一般」: 国術史以外の字句を用いた武術史に関する記事。

「門派・武器史」: 特定の門派・武器の歴史に関する記事。

「名人伝記」: 門派の開祖名や名人・達人の氏名が含まれる記事。

「歌訣/譜」: 武術に関する秘訣や伝承、詩句や格言などに関する記事。

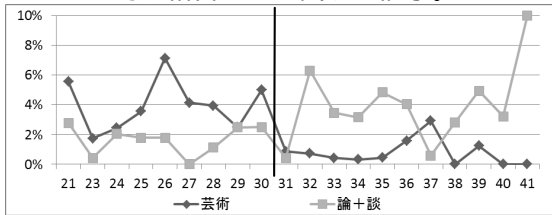


図 3-1 芸術、論+談

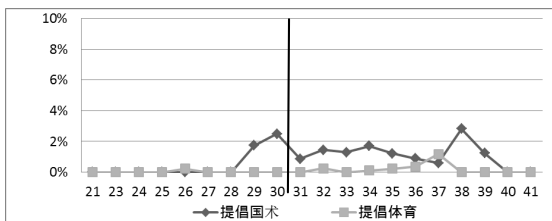


図 3-2 提唱国術、提唱体育

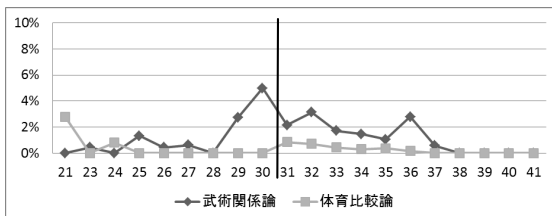


図 3-3 武術関係論、体育比較論

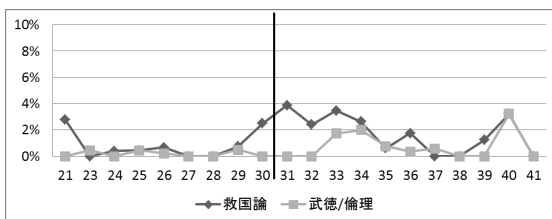


図 3-4 救国論、武徳/倫理

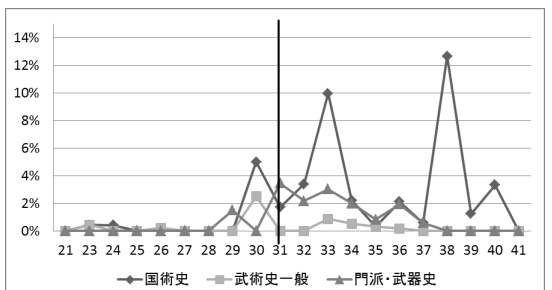


図 3-5 国術史、武術史一般、門派・武器史

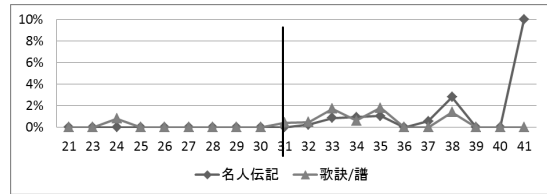


図 3-6 名人伝記、歌訣/譜

結果、前期には「芸術」が、後期には「論+談」「提唱国術」「武術関係論」「救国論」「武徳/倫理」「国術史」「門派・武器史」「名人伝記」「歌訣/譜」が多い傾向が見られた。

この傾向からは、前期では芸術と武術を並置することで、武術を高級文化の一つとして位置づけるという戦略がうかがえる。

一方、後期では以下の戦略が確認できる。一、「救国論」「武徳/倫理」を通じて武術の社会的役割を主張。

二、「武術関係論」において他領域と比較することで、武術固有の文化的価値を模索。三、「門派・武器史」「名人伝記」「歌訣/譜」を通じて武術の「歴史化」を行うことで、長い歴史を持つ「伝統文化」として提示。四、「国術史」の枠組みでの歴史化を通じて、近代国家・中国の「国民文化」として確立。

これらの戦略から、武術雑誌は前期には武術の文化的地位の向上を、後期には独自の社会的役割と文化的価値、歴史を持つ「中国の」国民文化としての武術の再構成を試みていたことが確認された。

(4) 門派分析

武術雑誌には各門派の技術や歴史、哲学を解説した記事が多数掲載されていた。そこで本研究では「記事タイトル」に門派の名前が記された記事を集計し、発行年度別にその割合を算出した(図 4-1~4-2)。なお形意拳については門派名に異同(行意、心意、意拳等)が多いが、すべて「形意拳」として集計した。

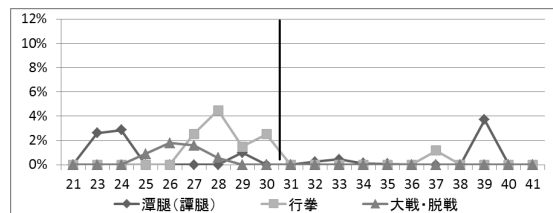


図 4-1 潭腿(譚腿)/行拳/大戦・脱戦

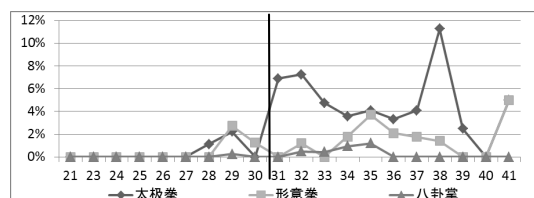


図 4-2 太極拳/形意拳/八卦掌

結果、両期とも多くの武術門派が紙面に登場していたものの、その大半が 1~2 回程度

の紹介にとどまっていたことがわかった。

しかし前期では「譚腿」(譚腿)「行拳」「大戦・脱戦」が頻繁に取り上げられていた。これらはのびやかで力強い動きの門派であり、号令とともに集団で練習されていた。それゆえ前期では、集団で体操のように訓練可能な体力づくりに適した体育的な武術が重視されていたことがわかる。

一方、後期では「太極拳」「形意拳」「八卦掌」、特に「太極拳」が頻繁に取り上げられていた。これらはリラックスや養生を重視し、「気」「五行」「太極」「八卦」等を技術思想のベースとした門派である。それゆえ後期では健康づくりに適した「中国的な」思想を持つ武術を重視していたことがわかる。

これらの結果からは、武術を前期では体操や体育と同様の効果を発揮する「中国発祥の近代体育」として、後期では中華文明の根底を受け継ぐ「中国独自の民族体育」として位置づけていたことがわかった。

(5) 武器分析

武術雑誌ではさまざまな武器や武器術も紹介されていた。そこで本研究では門派同様、「記事タイトル」に武器名が含まれる記事を集計し、その変遷を確認した(図5)。

結果、前期ではほとんど武器が取り上げられなかった一方で、後期では剣、槍、刀、棍・棒といった主要武器が比較的頻繁に紹介されていたことがわかった。

この傾向から、武術が前期では体操のような徒手中心の身体文化として、後期では中国独自の武器文化を反映した「民族体育」として扱われていたことがわかる。

さらに図5を見ると「剣」がもっとも頻出していることがわかる。「剣」は中国では伝統的にもっとも優雅で文化的な武器とされてきたことを考えると、この「剣」への着目も武術の文化的地位の向上という戦略の一環であったと推測される。

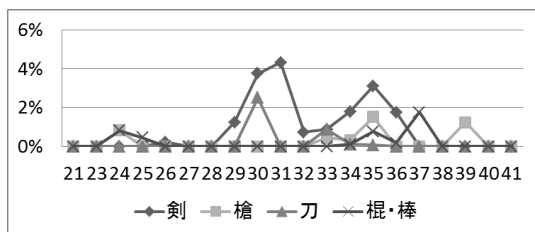


図5 剣/槍/刀/棍・棒

(6) 写真・イラスト分析

『民国国術期刊文献集成』収録の以下の前期・後期を代表する書籍・雑誌から写真・イラストを選出し、その被写体が体现するチャイニーズネスについて考察した(図6~9)。

前期

『精武本紀』。1919年出版。前期における武

術普及の中心であった「上海精武体育總會」の創立十周年を記念して出版。

『精武画報』1927~30年、隔週発行。精武会系雑誌でもっとも多数の写真を掲載。
後期

『中央国術旬刊』。1929~30年発行。

『国術周刊』。1930~36年発行。

ともに中央国術館発行。



左 図6 「精武画報 第二期」

(『民国国術期刊文献集成』第8巻p95)

右 図7 「中央国術旬刊 第六期」

(『民国国術期刊文献集成』第11巻p118)



左 図8 「中央国術旬刊 第十二期」

(『民国国術期刊文献集成』第11巻p436)

右 図9 「国術週刊 第146,147合期」

(『民国国術期刊文献集成』第25巻p158)

結果、前期には芸術や中国伝統の景観を写した写真が多数掲載されており、武術の文化的地位を向上させるイメージ戦略が確認できた。また技術解説では図6のような中国の伝統的な衣服を着用した演武写真が多様されていた。これらは長袖長ズボンのために体の線が確認しづらく、学習用としては不十分であったが、「中国らしい」イメージを与えるには効果的であったと思われる。

一方、後期では少林寺や古代武器の写真が多数掲載され、視覚的にも「歴史化」が促進されていたことがわかる。また技術解説では図7のような運動着や、伝統衣装を動きやすいように改造したいわゆる「カンフー着」着

用での演武写真、さらには漫画(図8)や線画(図9)が使用されていた。これらは前期に比べると「中国らしい」イメージは希薄なもの、手足の位置がはっきりと確認できるために、教材としてはより有用だったと思われる。

これらの結果から、武術雑誌は前期では武術を中国文化の一つとして印象付ける戦略を、後期ではその伝統的・歴史的イメージを膨らませる戦略を採用していたと言えるだろう。また技術解説の違いからは、前期では技術よりも文化的イメージを、後期ではイメージよりも技術を伝えることを重視していたことも確認できた。

(7)考察とまとめ

前期の武術雑誌はビジュアルと娯楽を重視する総合雑誌であったが、それはより幅広い読者を獲得することで、武術の社会的認知を高めるためであったと考えられる。そしてその使命は、武術を他の伝統芸術と同等の文化的位置にまで向上させることにあった。さらに武術を「中国生まれの(近代)体育」として身体の「近代化」(あるいは「西洋化」)を達成する手段として扱うことで、現代社会における武術の社会的役割をアピールしていた。

これらの試みから、前期は一部の民衆にとつての習俗でしかなかった武術を、広く国民の文化として再編成しようとしていた時期だと言えるだろう。しかし一方で、そこに付与された「中国らしさ」は、他の中国伝統の文化の焼き直しの域を出ず、武術が体現する「チャイニーズネス」とは何かを探る姿勢も希薄であった。

他方、後期の武術雑誌では「武術とは何か」が盛んに論じられることで、武術特有の文化的価値や社会的役割が探求されていった。加えて「国術」としての歴史化を通じて武術を「中国の」文化とした上で、中国哲学をベースとした武術をその代表としていった。

これらの試みから、後期は武術を単なる戦闘法や体育ではなく、中国文明の悠久の歴史と深遠な哲学から生み出された、まさに「チャイニーズネス」そのものを体現する国民文化としていった時期だと言えるだろう。

以上、本研究では武術雑誌における武術言説の変遷を明らかにすることで、武術を問うことが「チャイニーズネス」を問うことであり、それを身に着けることが「中国人らしさ」を纏うことであるという、武術が中国を代表する文化となっていた過程を明らかにした。

(8)本研究の国内外の位置づけとインパクト

これまでの国内外における武術の近代化やチャイニーズネスに関する研究の大半が、質的な手法を用いたものであった。他方で本研究は、量的な手法によってそれらの研究を

遂行した点でユニークな位置付けにあり、また計量的な歴史研究の事例を示した点でインパクトを与えたと考えられる。

特に台湾での口頭発表では現地研究者から多くのコメントが寄せられ、外国人が国術(台湾では現在でも武術の正式名称が「国術」のままである)の研究を、しかも計量的な手法で行っている点で強いインパクトを与えたことがうかがえた。

(9)今後の展望

本研究では、武術雑誌の言説の分析に焦点を絞ったために、この過程が官/民や地方/中央の間のどのような力学を背景に生じたのか、具体的には武術雑誌の発行元である各武術団体の成立過程や組織間の関係にまで踏み込むことができなかった。

それゆえ今後は本研究の成果を引き継ぎつつ、発行元の武術団体に関する事例研究を進めることで、官/民や地方/中央といった、現実社会での思想的・政治的力学の中で、武術のチャイニーズネスがどのように形成されていったのかを明らかにすることを課題としたい。

また国内外の研究者とのネットワークをもとに、本研究の成果を身体性と「...ness/~らしさ」を問う学際的な研究へと展開していくことも、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

池本淳一、2016、日中社会学会、チャイニーズネスの所有と定義をめぐるポリテイクス 中華民国期の武術運動における強種と健身の対立を事例に、日中社会学会、2016年6月5日、長崎大学(長崎県)

池本淳一、2016、民国時代武術運動的変遷的 Chineseness 形成：武術雑誌的内容分析、台湾身体文化学会、2016年10月16日、文藻外語大学(台湾・高雄市)

〔その他〕

池本淳一、民国期武術創造/想像的的身体與表象、第一回 日台「チャイニーズネスと身体」学術交流会 2017 in 台北・高雄、2017年2月22日、中国文化大学(台湾・台北市)及び2月23日、高雄第一科技大学(台湾・高雄市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

池本 淳一(IKEMOTO Junichi)

松山大学・人文学部・講師

研究者番号：90586778

(4)研究協力者

陳宝強(CHEN Baoqiang)

莊嘉仁(CHUANG Chiajen)